

# 小学校教育相談室における6年生男子児童とのプレイセラピー

岩 瀧 大 樹<sup>1)</sup>・山 崎 洋 史<sup>2)</sup>

1) 群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

2) 昭和女子大学大学院

## A Case of Play Therapy with Elementary School Boy

Daiju IWATAKI<sup>1)</sup>, Hirofumi YAMAZAKI<sup>2)</sup>

1) Center for Cooperative Research and Development on School Education Faculty of Education,  
Gunma University

2) Showa Women's University Graduate School

キーワード：プレイセラピー，学校教育相談，小学校

Key words : Play Therapy, School Counseling, Elementary School

(2011年10月31日受理)

### 〔はじめに〕

内的世界，混乱，不安などの言語化が困難な子どもに対し，教育相談ではプレイセラピーを取り入れることが多い。弘中（2005）は，「言語的な情報に限界があるゆえに，セラピストの直感的な判断と即興的な行動の冴えを要求される高度な心理療法」として，プレイセラピーをとらえている。ケースにより，子どもが抱えている苦しみ，不安，やり切れなさなどが，遊びに表現される。多くの実践が検討されているが，本事例では，小学校のスクールカウンセラーである筆者（以下SC）が関わった，6年生の男子児童との約1年間のプレイセラピーについてとりあげていく。

### 〔事例の概要〕

#### 1. 対象児と問題

A（小学校6年生男児）。細身で中背。やや肌の色は浅黒い。5年生から2年連続でAの学級担任をする教員（女性，40代）よりSCに，①学級内でAが孤立傾向

にあること，②他の児童とのトラブルがある，などについて相談があった。

#### 2. 生育歴

先天性の循環器系の疾患を抱える。9歳時に一度段階的手術を受けており，X+1年1月に最終手術を受ける予定である。初歩，初語に気になることはなく，むしろマイペースで過ごすことが多かった。保育所では引っ込み思案なところがあるものの職員や教員のサポートもあり，集団活動の際に取り残されたり，外れたりすることはなかった。しかし小学校入学後，仲間外れにされたことがあった。その際は教員のサポートもあり，問題は解決した。高学年になると周囲の児童が，Aが疾患を抱えていること，運動制限があることなどを把握するようになり，Aを気遣ったり，手伝ったりする場面が出てきた。しかし，Aが他者と積極的に関わろうとしない一方，声を大きくして目立とうとする場面も出てきた。そのため，他の児童は次第に表面上はAを受け入れつつも，回避する場面も見られるようになってきた。教室内では，自ら発言することは

ほとんどないが静かに取り組む。しかし、運動制限があるものの、自ら志願して体育委員をしており、授業や行事、集会などで準備運動を行う際には、先頭で最も大きい声を出す。そのため、他の児童から「優等生ぶっている」などと言われ、トラブルとなることもある。

### 3. 家族

父親(40代、会社員)、母親(40代、専門職)、姉(中学校1年生)の4人。父親は医療器具メーカーに勤務。もの静かではあるが、社内の運動部に所属し、アクティブに活動をしている。母親も医療関連に従事し、高齢者などのサポートをしており、職場では管理職も兼務している。Aの疾患に関しては、ネガティブにとらえず、少しずつ良い経過に向かっていてと考えている。しかし、Aがたびたびトラブルを発生させることを懸念している。1歳年上の姉は、口数は少ないが、運動能力が高く、中学校の運動部では1年生からレギュラーを獲得し、地区大会などで活躍している。

### 4. 面接構造

毎週SCの勤務日の放課後に50分程度、Aに対し、個別に関わり、母親との面接も設定していく。また、適宜教育相談部会にSCも出席し、Aとの面接の経過を報告するとともに、学級担任や養護教諭とコンサルテーションや情報交換を行い、共通理解を図りながら、チームとしてAの支援や理解をすることとした。

### 5. Aへの教育相談的理解と介入方針・計画

#### ① 保護者面接(母親)

疾患を抱えていることで、上のきょうだいと比較し、やや対応に甘さがあったかもしれない旨を話す。自ら決めたこと(大型熱帯魚の世話など)は、忘れずに細かい部分まで責任を果たす。そのため、できる部分を個性ととらえ、伸ばしていきたいと考えている。一方で、手を抜くことも覚えてほしいと話す。

#### ② 学級担任からの情報

教室内では消極的であるが、実技の教科には非常に積極的に取り組む。特に「声を出す」場面では、よりその傾向が顕著となる。学級や学年での合唱練習、体操での号令が小さい場合、教員が注意をすると他の児童は受け流すものの、Aは人一倍大きな声を出す。ま

た、清掃や給食準備などで、他の児童の緩慢な様子を教員が注意をすると、Aがより張り切って活動に取り組む。ただ、そのAの行動に対し、他の児童がトラブルをもちかける言葉を発することもあり、対応に困っていることも話された。成績は中位程度。

#### ③ 養護教諭からの情報

激しい運動など、複数の運動制限はあるものの、日常の学校生活は普通に過ごしている。欠席は通院、検査入院関連のものである。他の児童とのトラブルがあった場合に保健室に来室することが多い。

#### ④ SCによる行動観察

休み時間などは同学年の比較的に静かな男児と一緒にいる。一斉授業には静かに取り組む。グループディスカッションなどの際には黙っているものの、リーダーの児童に話しかけられたり、注意されたりすると、簡単な応答をする。清掃の際には、他のメンバーがふざけたり、手を抜いたりしても、一人で細かい部分の清掃や、備品の修理などを黙々と行っていた。

#### ⑤ 問題の理解と介入の方法

実技の授業、教員が声を出すことを指導する際などで大きい声を出すことから、Aの他者からの承認に関する問題が考えられた。A自身が自分の努力を周囲にも分かりやすい言動で示すことで、それを満たそうとしている様子が推測される。清掃や給食準備においても同様であろう。そのため、まずはAが自分自身の言動を他者に認められる、受け入れられるといった体験を取り入れたプレイセラピー(遊戯療法)を行うこととした。

#### (プレイの経過)

〈 〉はSC, 「 」はAの発言を示す。

#### 第1期: X年4月~7月(1学期)

##### 第1回

養護教諭と来室。ぬいぐるみやゲームなどがあることに対し、驚く。椅子に腰かけ、「先生(SC)のこと、見たことある」と話す。〈この部屋を知っていた?〉と尋ねると、「知っていたけれど、中に入ったことはなかった」と答える。〈ここは、いろいろな話をしたり、一緒に遊んだりする部屋なんだ。もしAくんがよければ、一緒に話をしたり、遊んだりしたいんだけど、どうだろう?〉と問いかけると、うれしそうな表情を見

せ、「いつ来ていい？」と尋ねる。そこで、SCの出勤日の放課後、50分程度来室する約束をした。

### 第2回

時間どおりに来室。おもちゃ箱に詰まっていたぬいぐるみをすべて出し、空にすると、「こんなに（ぬいぐるみが入ってた）と叫ぶ。〈どのくらい入ってると思った？〉と返すと、「大きいのは見えたけど、小さいのがつまっていたから、びっくりした」と応答する。そのうち、中程度の大きさのプロ野球チームのマスコット人形を手にとると、「ハイ！」と投げた。SCがキャッチし、〈これ、（Aくんに）投げていい？〉と問うと、「OK！」と返す。しばらくマスコット人形でのキャッチボールが続く。Aはキャッチするたびに、「よっしゃ」、「おー」などの声を発していた

### 第3回

戸棚にあった古新聞を見つけ、「これは？」と尋ねる。SCが、〈何に使うと思う？〉と返すと、首を傾げる。そこで、絵具やクレヨンを指さすと、「下に敷くんだ」と答える。〈その他にもあるかも〉と問うと、Aは新聞紙を取り出し、兜（かぶと）を折りだす。やや折り目が揃っていなかったが、自分でかぶる。〈何？〉と尋ねると、「兜だよ。昔の戦いとかでサムライがかぶったやつ。（地域交流活動の）昔遊びの時間に教えてもらった」と答え、さらに紙でっぽうも折る。紙でっぽうもやや折り目が揃ってはいないが、パンパンという乾いた音が立つため、Aは得意そうな表情をみせる。しばらくすると、「先生何か作れる？」と尋ねる。〈うーん、忘れちゃったなあ〉と返すと、「教えるから、紙でっぽう作ろう」と言う。そこで、Aに教えてもらいながら、SCも一緒に紙でっぽうを折った。SCが間違えたふりをすると、「やり直して」、「こっちは山折り」などと積極的に声をかける。その後は、二人で大きな音を出せるように競い合った。

### 第4～7回

入室し、ソファに座って相談室全体を見渡す。その後、おもちゃのラケットボールに興味を示し、「やろう！」ともちかけることが数回続く（#5～#7）。当初は単純にボールを打ち合っていたが、次第に、「これがネット」、「ここを越えたらアウト」、「先に15点取ったら勝ち」などのルール設定をする。また、付属のボールに慣れると、バドミントンのシャトル、カラーボールなどの使用も提案する。バウンドの様子が異なるが、

Aは「うわ」、「取れねー」などとその都度ラリーを楽しんでいた。

### 第8回

1学期の最終回。だいぶ蒸し暑い日であったが、風通しのいい相談室に来ると、「涼しい！この部屋いいな」と語る。その後、早速ラケットボールを提案する。この回ではゴルフボールを使う。しばらく遊んだ後、「トランプもやる」と言い、ソファ上でのクマのぬいぐるみ（以下クマ）横に座る。ゲームをしながら、「俺の手術のこと知ってる？」と尋ねたため、〈Aくんのお母さんから少し聞いたよ〉と返す。「前も手術したけど、冬にもう一回やるんだ。中学生になる前に」と言う。〈3学期？〉と尋ねると、「お正月過ぎてからってお母さんと病院の先生が言ってた」と話し、今までの入院での様子を語る。医師や看護師には『わがママを言わなくて偉い』と褒められることが多く、他の入院中の子どもが泣いたり、文句を言ったりすると、『Aくんはちゃんとやっているよ』などと引き合いに出されることを話し、得意そうな表情を見せる。頻りに顔を合わせる同年代の子どもがおり、彼のことを「すぐ泣く。（みんなに）甘えてるんだよ。でも、俺が相手をしないとみんなに怒られるから、遊んでやるんだ」と気にかける様子を話す。さらに、いつもサッカー（海外リーグ）が話題になるらしく、二人の好きな選手やチームについてSCに語り続ける。一段落したところで、〈二人ともサッカーが好きなんだ。Aくんも一番はそれ（サッカー）？〉と尋ねると、「うん」と言い、ランドセルを開け、ポケットの中にあった海外の選手の切り抜きを見せる。ある選手（Y）に関するものが多く、〈この選手が多いね〉と聞くと、「一番好き。Y。瞬発力がすごい」と言い、Aが見た試合の様子を語った。そして、「俺もできればいいんだけど、サッカーはあまりできないから」とつぶやくが、すぐに夏休みに出かけるキャンプの話に切り替える。終了間際に、〈しばらく会えないけれど、何か（SCに）話しておきたいことある？〉と聞くと、やや考え込んでいたが、「今日も遊べたし、話もできたから平気」と答える。夏休み明けの来室を約束し、1学期は終了となった。

### 1学期全体のコンサルテーション

（学級担任、養護教諭、教育相談担当、SCなど）  
授業中での大きな変容はない。学級担任からは、Aを認めるべく、声を出す活動でAの取り組みを他の児

童に示すが、そのことで反発を受けるため、指導に不安を抱えていることが報告される。そこで、①Aに対しては個別にその取り組みを認めていく、②他の児童に対しては、特にAだけの取り組みだけではなく、積極的に取り組んで入るA以外の児童とともに取り上げる、などの支援・指導の方向性が示された。また養護教諭から、Aが保健室でプレイの様子を報告していることが話された。Aにとって大切な時間であることがうかがえたため、プレイを継続することとした。

## 第2期：X年9月～12月（2学期）

### 第9回

相談室宛てに母親から残暑見舞い（絵葉書）が届く。最後の部分にAの字で「2学期もおねがいします」と書いてあった。約1か月ぶりの来室となり、「久しぶりー」と言いながら、ソファーに横になる。クマをまくら代わりにしながら、SCに「（夏休み中も）ここ（相談室）にいたんですか」などと話しかける。絵葉書の話になり、〈Z（絵葉書の写真にあった観光地）に行った？〉と尋ねると、「おじいちゃんやおばあちゃんが住んでる。生まれたのはZの近くだけど、俺が手術するのと、お父さんの仕事で、こっち（現在の住所）に来た」と答える。夏休み（Zへの帰省）の話をしつつ、立ち上がり、「やろうよ」と言い、自動車型のぬいぐるみでのキャッチボールをもちかける。「足もOKにしよう」と言い、サッカーのリフティングをするような動作も見せる。歓声をあげながら、キャッチボールやラリーをした後は将棋を持ち出し、「こういうの知ってる？」と言い、SCに回り将棋のルールを説明し、一緒に行く。〈面白い遊び方知っているね〉と話すと、「お父さんのパソコンとか、〇〇（ポータブル型ゲーム機）でやってる」と答える。回り将棋でも「やった」、「（SCが多い目を出すと）えー」などの声を出す。声を発しながらSCの視線や表情、反応を気にすることが多くなったように見受けられた。

### 保護者面接（母親）

2学期終了後まもなく手術を行う旨が伝えられた。体力、体重ともに問題はないことを報告する。2学期は心身ともに安静にし、手術に挑みたいことが語られる一方、相談室でのプレイの様子をAが毎回家庭で報告していることも話された。

### 2学期当初のコンサルテーション

### （学級担任、養護教諭、SCなど）

学級担任より、Aが大きな声で取り組むことがほとんどなくなっていることが話された。音楽科の教員が尋ねたところ、「別に」とのみ答えたという。一斉授業では、人気アニメのキャラクターや象徴的な図形などの落書きをする、描いては消す行動が多くなったこと、一人でいる時間が増え、人気アニメの本などを読む姿を見かけるようになったという。また養護教諭からは保健室への来室が増え、室内の簡易ベッドに寝そべり、養護教諭に雑談をもちかけているとのことであった。欠席の増加、学習活動の放棄、他の児童とトラブルなどの不適応行動は確認されなかったため、落書きに関してはある程度許容し、積極的に声をかけて様子を見守り、サポートをすることが確認された。

### 第10～11回

ラケットボール、キャッチボールなどではなく、カードゲーム（トランプ）、将棋（対戦、回り将棋など）、ジェンガ、立体パズルなどのテーブルゲームをもちかけてきた。

### 第12回

来室後ソファーに寝そべり、クマを枕にして頭を振る。SCは対面のソファーに座り、Aの様子を見ていた。Aはしばらく頭を動かしていたが、「先生、俺のやりたいことやっていい？」と話しかけてきた。そのため、〈この部屋で、この時間で、Aくんや周りの人を傷つけないことだったらOKだよ〉と答えた。すると、「傷つけるって？」と尋ねたため、〈Aくんや僕（SC）、Aくんの友だちや先生たちが怪我をしない、ということなんだけど〉と返すと、「治すのは？」とさらに質問してきた。そこで、〈Aくんが、治したいのって？〉と尋ねると、Aは体を起こし、枕にしていたクマをソファーに座らせ、「これ（クマ）を治したい」と話す。〈（クマは）どこか悪いの？〉と尋ねると、頷く。SCが了解した旨を伝えると、「じゃあ、入院の手続きをする」と言い、室内のパーテーションや椅子を動かし始めた。パーテーションで室内の一隅を囲み、そこに椅子を二つ並べて、「ここがベッド。で、ここに入院」とSCに話す。次に、「部屋を決めるから、白い紙を使っていい？」と告げたため、描画用の画用紙と上質紙を数枚、Aに渡した。するとAは、画用紙をはさみで切って何枚かのカードを作成し、それらに『カルテ室』、『面会室』などと記入し、室内の戸棚や壁などにセロハンテープで



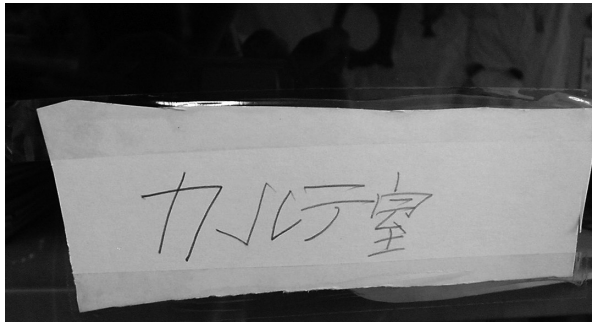


図1 Aが設定したカルテ室

貼り出した(図1)。

また、上質紙には『くまのくま介さま びょう室  
かん係者がい立入きん止』と記入し、クマの病室の  
壁となっているパーテーションに上記と同様、セロハ  
ンテープで貼っていった。

その後、クマを病室内の椅子のベッドに横にし、  
ティッシュペーパーをたたんだものをガーゼに見立て  
て、クマの腹部にセロハンテープで貼った。終了時刻  
の間際になると、「今日は入院初日」と言い、SCに「次  
来る時に、ひもを使ってもいい?」と尋ねたため、〈来  
週、準備しておくよ〉と答えると、「来週、続きをやる」  
と言い、退室していった。

### 第13~14回

第13回では学校行事の準備などもあり、やや遅れて  
入室。室内を見渡し、前回に掲示したカードや、クマ  
の状況を確認すると、「先生、ひもは?」と尋ねる。SC  
が、風呂糸、布テープ(数色)を見せ、〈これでいい?〉  
と確認すると、布テープを見て、「これがいいや。使っ  
ていい?」と問う。SCが了解すると、水色とピンク色  
の布テープを取る。そして、「最初はこれがないと」と  
言いながら、戸棚にあった茶色の色画用紙を使ってい  
いか尋ね、SCの許可を得ると箱状のものを折り、クマ  
の腹部にセロハンテープで貼り付けた。次に、積み木  
のケースをおもちゃ箱から取り出し、「循環には必要」  
と言い、水色の布テープと風呂糸でクマの右腕と結びつ  
けた。ピンク色の布テープは腹部と茶色の色画用紙と  
つながれた。Aがクマを起こしたり、横たえたりした  
ため、セロハンテープははがれてしまったが、その点  
に関しては気にしていない様子であった(図2)。

第14回では、クマのガーゼ(ティッシュペーパー)  
を貼り替えたり、新たな湿布(カットした白い画用紙)  
をクマの首に付けたりした。その際、Aは、「そっち押



図2 第13回でAが処置したクマ

さえて」、「ここ持って」など指示を続けた。

### 第15~16回

第15回では入室後、クマの状況を確認すると、「これ  
使っていい?」と、落書帳にしていたA4サイズの用  
紙を手取る。〈好きにしていよ〉と答えると、数枚  
を切り取り、SCのデスクに向かい、鉛筆で文字を書き  
始めた。時折、SCに「看護師のかんってどういう字?」、  
「獣医のじゅうって書いて」などと尋ねたため、その  
都度、「看」、「獣」などの漢字を記した。Aの後に立ち、  
様子を見ていると表紙を『くまさん カルテ』と記入  
したカルテを作成していた。カルテには、『びょうじょ  
う 心臓発作と首にけが 白血病 心臓ガン』、手術  
『心臓移しよく 心臓ライン内視鏡手術 白血病 心  
臓ガンてきしゅつ開ふく手術』、担当医『A(自分の名  
前)、B(仲の良いクラスの友人の名前)』、と書き、さ  
らに、患者(クマ)の名前、血液型、生年月日、年齢、  
入院日、住所、所在地などを記入していた。住所は相  
談室、所在地はAが入院予定の病院である『C医科大学  
病院』を『C獣医科大学病院』として書かれていた。  
また、担当看護師には、別の友人の名前が書かれた。  
そして、クマが横になり、各部位での治療の様子や布  
テープ、点滴、循環器の疾患に必要なと思われる装置な  
どを記入したイラストを描き、『ゆ血中』、『〇月〇日  
ばっ糸完了』、『治りよう中』、『オペ予定』などと手術  
の経過が把握できるような矢印を書き込んでいた。

第16回でも前回に引き続きカルテを記入していた  
が、途中で手を休め、SCの方を見る。SCが首を傾げ  
ると、「先生も一緒なんだ」と言い、カルテの一部にある、  
クマへのサポートメンバーの表にSCの名前を記入す

る。その後、『たべてはいけないもの』や『血あつの記  
ろく』などの表も作成する。終了時刻になると、『カル  
テ室』のカードを貼った室内の戸棚に、「(カルテを)  
しまっていていい?」と尋ねてきた。SCが頷くと、戸棚を  
開け、カルテを中に入れる。そして、「あー、疲れた」  
と言いながらランドセルを背負う。通常のケースでは、  
笑みを浮かべながら帰り支度をすることが多かったが、  
この2回は、やや表情が硬いように見受けられた。

### 第17回

入室後、『カルテ室』からカルテを取り出し、しばらく  
眺める。その後、「そっち持って」と言い、SCにクマ  
の足の方を持つよう指示を出す。椅子のベッドからク  
マをSCのデスクの上に移す。そして落書帳を手取る  
が、「違う」とつぶやき、「他の色の紙ってない?」と  
尋ねる。〈色の紙って、折り紙とか?〉と聞くと、「折  
り紙じゃ小さい。カルテくらいの大きさの」と言った  
ため、SCは色画用紙を何色か準備した。すると、「黒が  
いいけれど、線が見えないか」と言い、茶色の色画用  
紙を選ぶ。〈その色でいい?〉と聞くと、「今日はレント  
ゲンを撮る。だから暗い色がいい」と言い、色画用  
紙を半分に切り、A4程度の大きさの2枚にした。続  
いて、「準備ができたなら声をかけて」と言ったため、〈こ  
ちらはいつでもOKです〉と答えた。すると、「ありがと  
う」と言い、SCのデスクの片隅で色画用紙にクマのレ  
ントゲン写真を描きだした。SCはAの隣でその様子を見  
守っていると、「頭も切開しないといけない」、「心臓  
と肝臓は検査手術の経過をみる」などと話しかけてき  
た。2枚のレントゲン写真は、全身のもの、頭部と腹  
部が中心のものであった。描き終わった後は、「病室に  
戻す」と言い、二人でクマを椅子のベッドの上に戻す。  
その後、カルテに検査スケジュールを書く。室内のカ  
レンダーを見て、この日の付には『レントゲン』、翌  
日から次回の面接までは空欄を作成し、次回の面接の  
日程に『心ぞうライン検査手術』と記入し、「来週は手  
術」とSCに告げ、退室していった。この日も表情には  
やや硬さが見られた。

### 第18回

時間よりやや早く入室。「(早いけど) いい?」と声  
をかけてきたため、室内に招き入れる。「今日は手術」  
と言い、SCにカルテを取り出すように依頼する。SCが  
カルテを渡すと、空欄に、『いじょうなし』と記入し、  
「予定どおり手術」と話す。この回は、室内のセンター

テーブルを手術台に見立てていた。レントゲンの際と  
同様に、SCにクマをベッドから運ぶのを手伝うように  
指示をする。次にSCに、「カッターを貸して」と話す。  
カッターナイフは安全のために、鍵付きの引き出しに  
保管してある。そこで、引き出しを開け、中程度の大き  
さのカッターナイフをAに渡す。〈何か切る?〉と尋  
ねると、しばらく言いにくそうにしていた。SCが応答  
を待っていると、「このカッターでくまさんの手術をし  
たい」と言う。〈心臓ラインの手術って、カルテに書い  
てあったね〉と返すと、「だから、手術。いい?」と答  
える。〈カッターを使ってどうするの?〉と尋ねると、  
「心臓の手術をする。メスに使用したい」と話す。SCが  
了解した旨を告げると、「これ(カッターナイフ)で手  
術する」とやや力強く話す。

SCを手術助手にし、「麻酔は大丈夫。始めます。よろ  
しく」と言う。「メス」と告げたため、先ほどのカッター  
ナイフをAに渡すと、クマの胸部をカッターナイフで  
切り開く。ぬいぐるみの生地が滑る素材であったため、  
切りにくそうではあったが、強めに刃を刺し、切り開  
いていった。ぬいぐるみの中の綿が出てくると、それ  
を握りこぶし2つ分ほど取り出し、代わりにおまご  
とで使用するカップを中に入れる。さらにそれを取り  
出し、「肺を洗浄する」と言い、しばらく触っていたが、  
再度ぬいぐるみの中に埋め込んだ。次に、SCに「鉗子  
(かんし)」という指示を出す。当初、SCは何を示すの  
か不明であったため、〈どこにありますか?〉と尋ねると、  
「ここだ」と言い、SCのデスク上の事務用クリップ  
を持って来て、SCに渡す。SCがAに改めて手渡すと、  
クリップでぬいぐるみの切り開いた中を数か所はさ  
み、肺に見立てたカップを触っていた。しばらくして、  
「縫合」という指示を出したため、〈どの道具を使いま  
すか?〉と尋ねると、戸棚からガムテープを持ってく  
る。そして、SCに「そっち持って」、「切って」などの  
指示を出しつつ、切り開いた部分をガムテープで貼り  
付けていった。また、第13回で作成した茶色い箱状の  
紙や積み木ケースを結んでいる各々の布テープを切り  
開いた部分に差し込み、さらにその上からガムテープ  
を貼り付けた(図3)。

クマをゆっくりと椅子のベッドに戻すと、カルテを  
手に取り、SCのデスクに向かった。当日の日付と手術  
の開始・終了時刻とともに、SCに漢字を尋ねながら、  
『血きゅう増量 薬投とう(ママ)与 肺を洗浄 しつ



図3 第18回でAが処置をしたクマ

とう A』と書き込む。また、スケジュール表には『心ぞうライン検査手術』と再度記入する。その後、別のカルテを作成し、体温・心拍数などのチェック項目と、担当者のサインを記入する表を書き入れた。

10分ほど延長し、この回は終了となった。Aは、「来週も検査手術」と話していた。前回に引き続き、表情の硬さも多少見られたが、それ以上に力強い口調で退室していった。

第19回

時間どおりに来室。パーテーションで囲まれた病室内のクマの様子を見て、「カルテください」と言う。SCがカルテを渡すと、体温や食事の様子などを記入する欄を埋め、「サインください」と言う。そこで、サインの欄にSCが苗字を書き入れた。そして、「今日は肝臓の検査手術」と言い、SCのデスクに向かい、新たなカルテにクマの全体像を描き、さらに、開腹する部分を拡大し、鉗子で回りを囲んだ絵(図4)を描き、「今日はここをやる」とSCに伝えた。



図4 クマの手術予定の絵

次に、「患者を手術室に移動します」と言ったため、前回までと同様に、二人でセンターテーブルの上にクマを運んだ。そして、「またカッターを使っていますか」と尋ねたため、前回と同じカッターナイフを

渡した。次に、AはSCのデスクや戸棚からクリップや羅紗ばさみ、ガムテープなどをもってきた。前回と同様に、SCを手術助手にし、「始める」と言い、クマの下部左右2か所をカッターナイフで切り開いた。この回は、中の綿を出したり、他のものを埋め込んだりするのではなく、クリップで留めたそれぞれの傷口に手を入れ、中をかき混ぜたり、羅紗ばさみで綿をカットしたりしていた。その後、「縫合」と言い、SCと一緒にガムテープで開いた部分を閉じていった。その際、Aは紫色と臙脂色の折り紙と緑色の色画用紙を戸棚から取り出し、折り紙を二枚重ねて左側に、色画用紙を折り畳んで右側の傷口に貼り合わせた。そして、「疲れた」と言いながら、クマをベッドに移動させる。退室の際は、「さようなら」と言うことが多いが、この回は「ご苦労様でした」と言う。また、クマの様子をもう一度見てから退室していった。

第20回

Aの通院により2週間ぶりのプレイとなる。来室し、開口一番に「(クマは)そのままですか」と尋ねる。〈この間から異常はないよ〉と言い、一緒にパーテーションを開く。この回は、Aが自分自身でカルテを取り出した。そして、SCのデスクに向かい、カルテを見直し、「今日は頭」とつぶやく。SCにクマの移動と、カッターナイフの準備を依頼したため、SCはそれに応じた。しかし、カッターナイフは手に取ったものの、しばらく考えていた様子を見せ、その後SCのデスクの上に戻す。そして、白の画用紙とピンク色のマジックペンを戸棚から持ってきた。画用紙に『(手術)ガード中』と書き、クマの頭部にガムテープで貼り付けた(図5)。

再び椅子のベッドにクマを戻し、カルテにチェック項目の記入を行う。

なお、この回は2学期最後であり、冬期休業を迎え



図5 第20回のクマの頭部



た後に、Aは手術を迎える。Aは「俺1月〇日に手術するんだ」と伝え、入院した場合の生活、年末年始にはA宅に祖父母が来ることなどを話す。手術そのものに関する内容は話されなかった。帰りには、「ご苦労様でした。ありがとうございます。次はいつになるかわからないよ」と語る。〈クマはそのままにいるから。学校に来られるようになったら教えてね〉と伝えた。

#### 保護者面接（母親）

手術が予定どおりに実施されるとの報告を受ける。いつも通りの元気の良い母親の声ではあったが、やや緊張感も感じられた。退院後、Aを待っていることを伝える。

#### 2学期全体のコンサルテーション

##### （学級担任、養護教諭、SCなど）

一時期、大きな声を出すことを控えていたことが報告されたが、音楽発表会の練習、本番では、まずまずの取り組みが見られたという。一人でいることには変化は見られなかった。また授業中の消極的な態度にも変化はなかった。しかし、落書きをすることはなくなったとのこと、学級担任にもSCとのやりとりを報告することも話された。

#### 第3期：X+1年1～3月（3学期）

##### 養護教諭との情報交換

冬休み明けに手術は終わっているはず予定であったが、院内感染の影響により手術が延期になったことが伝えられた。また、Aの母親より面談が希望されている旨が話された。

#### 保護者面接（母親）

やや疲れた表情で来室。SCに今回の手術延期を伝える。また、今回の対応は、万一を考えてのことであるとの説明を病院から受けた経緯を話す。しかし、今までずっと最終手術に向けて、母親として、家族として様々なサポートや気持ちの準備を続けてきていたが、思いもよらぬ延期となり、張りつめていた気持ちが一気に切れてしまった、再検討された日程に向けて気持ちが作れないと語り、涙ぐむ。そして、その気持ちがAにも伝わり、Aも家でほとんど話さずにいると語った。しばらく手術の延期を残念がっていたが、「私がマイナスのオーラを放つから、Aや家族にもそれが影響しているんですね」と話し、改めて行われる手術に向けて準備をしていきたいという展望を語った。

#### 第21回

時間よりやや遅れて来室。「(手術が)延期になったの知ってる?」と尋ねてきたため、〈そうだったんだね〉と話し、室内に招き入れる。パーティションの奥のクマの様子を気にしながらも、口に出したり、見ようとしたりはしなかった。Aは「今日はこれしよう」と言い、ジェンガを取り出す。Aが「使うのは片手だけ」、「移動して取るのはOK」などのルール設定をして、ジェンガが始まる。ピースを積み上げながら、「おっ、難しいー」、「無理」などの声を発していた。最初に崩れた際、「あー」という長いため息をもらす。SCがAの顔を見ると、「もう一回やろう」ともちかけてくる。また同様にピースを積み上げていったが、2回目に崩れた際には、すぐに「もう一回」と言いながら、ピースを集め始めた。この回は、ジェンガにのみ取り組んでいた。

#### 第22回

時間どおりに来室。「2月〇日に手術になった」と独り言のようにSCに報告する。母親より電話連絡を受けていたが、〈(日程が)決まったんだ〉と返答すると、「だから来週は来られないと思う」と答える。この回は、パーティションを開け、クマの様子を見る。しばらくは無言で縫合に使ったガムテープや布テープを触っていたが、頭部に貼った『(手術)ガード中』の画用紙については「もういいかなあ」とつぶやく。一旦剥がし、SCに渡す。その後、カルテを取り出して眺めていたが、「やっぱり(画用紙を)返して」と言い、SCから受け取ると、再度クマの頭部に貼り付けた。

その後、将棋盤を持ち出し、回り将棋をもちかける。しかし、回り将棋はせず、「こういうの知ってる?」と言い出し、崩し将棋の説明を始めた。ルールとして、「絶対に音を立てちゃだめ」と確認をする。Aは1回にとる数が少ないながらも一手一手確実に音を立てずに量を増やしていった。終了時刻になり、取った駒を比較すると、Aの方が強い駒を多く取っていた。「先生はすぐに音を立てるから弱いんだよー」と語る。そして、「手術終わったらまた来る」と言い、退室した。

#### 3学期全体のコンサルテーション

##### （学級担任、養護教諭、教育相談担当、SCなど）

2月下旬にAの手術が無事に終了したことが保護者から学級担任、養護教諭に伝えられた。しかし、A自身がやや体調を崩していることもあり、退院後もしば



らくは自宅療養をするとのことであった。3月の面接やプレイの日程を組むことが難しい様子であったため、Aの体調が落ち着いている時期に電話面接を行うこととした。

#### 第23回（電話面接）

母親との話のあと、Aに電話を代わった。Aから手術の報告、体調が戻ったらすぐに中学校に行くこと、制服を親戚から譲り受けたことなどが話された。相談室でのやりとりやクマの様子などは語られなかった。最後に、「先生は、来年も（相談室に）いるんですか？」と尋ねる。来年度も継続して勤務する旨を伝え、「がんばってください。ありがとうございました」と話して電話を切った。

#### 第4期：X+1年5月（中学校入学後）

##### X+1年年度当初のコンサルテーション

###### （小中学校の養護教諭，SC）

小中学校の養護教諭と、Aの様子および小学校相談室での取り組みなどについて、学校移行に伴うコンサルテーションおよび情報交換を行った。中学校の養護教諭から、Aは比較的仲の良かった子どもたちと同じクラスに編成されていること、中学校のスクールカウンセラーなどによるサポート体制が組まれていることなどが報告された。

##### X+1年1学期当初のコンサルテーション

###### （小中学校の学級担任，小中学校の養護教諭，SC）

中学校の学級担任より、Aが無事に新たな生活をスタートさせていることが報告された。また、中学校の養護教諭からは、運動制限はあるものの、サッカー部に所属し、記録などを担当していることが話され、他の子どもたちとの関係も、適切な距離を保ちながら適応していることが報告された。これらをもとに、SCとしてはAが中学校生活に適応していると判断し、プレイに使用したクマやカルテ等は、いったんロッカーに保管することとした。

#### 第24回

5月下旬、放課後にカウンセリング業務を行っている時、相談室のドアがノックされた。ドアを開けると、養護教諭に連れられてAの姿が見えた。簡単に挨拶をすると、すぐに「先生、最後までやりたいんですけど、いいですか」と告げる。〈クマ……？〉と尋ねると、「そう。今日しかできないんで」と答える。そこで、現在

はカウンセリング中であるため、その終了後でいかに了解を求めると、安堵した表情を見せ、「今日できればいいよ」と返答する。養護教諭が保健室で待機させると申し出てくれたため、30分後、Aが来室することとなった。

カウンセリング終了後、第22回と同じ状況に部屋を復元する。来室したAは、「すみません」と言う。やや痩せ、落ち着いた印象を受ける。さっそくカルテを取り出し、SCとクマをセンターテーブルに移動する。頭部の『（手術）ガード中』を最初にはがす。そして、積み木ケースなどつながれた水色・ピンク色の布テープ、風呂糸、腹部左右の折り紙・画用紙などの順番で静かに外し始めた。無言でゆっくりと外し、手術助手役のSCに手渡す。そして、改めてクマの傷口にガムテープを丁寧に貼りなおしていった。クマは、胸部と下腹部（2か所）を新たなガムテープで貼られた姿になった。Aはしばらくその姿を見つめていたが、やがてクマをSCとともに椅子のベッドに移動させた。そして、SCのデスクに向かいカルテの記入を始めた。カルテにこの日の日付を書き入れ、その横に『たい院』と記す。そして、一人で椅子のベッドからクマを抱きかかえて移動させ、ソファの上に座らせた。「これでくまさんは退院です。良くなりました」と宣言するように声を発すると、「ふうっ」と息をもらす。そして、SCの方を振り向き、「先生、これでもうOKです」と言った。〈無事、退院だね〉と返すと、数回頷く。改めてSCの方を向き、「先生、ありがとうございました」と言い、一礼して退室。昇降口に向かっていった。振り返ることはなかったが、ゆっくりしたその足取りには力強さが感じられた。

##### 1学期中盤のコンサルテーション

###### （小学校の養護教諭，SC）

継続的に実施される中学校との情報連絡会では、Aの名前があがることはなかったと報告された。マイペースなところはあるものの、トラブルを起こすことはなく、また、仲の良い友人が他の友人とのパイプ役となっていること、真面目に記録を担当していることからサッカー部の顧問の教員や3年生の生徒と良好な関係であるとのことであった。

## 〔考察〕

第1期は、SCとのラポール形成と、Aの思いを受けとめる時期であったと推察される。プレイ開始時の主訴は、他の児童とのコミュニケーションに関わるものであった。キャッチボールや紙でつぼう、ラケットボールは、Aがリードし、SCがそれに寄り添っていくものであった。やや年齢とは不相応なプレイもあったが、Aがルールなどの設定をする、SCに教える、などのイニシアチブ（主導権）をとることは、自分の意見や考えが受け入れられた、受けとめられたという経験につながったと判断できる。また、得意そうな表情を見せる場面があった（第3回、第8回）。この点でも、Aが承認を求めていることがうかがえる。自分自身でプレイの内容を選択する、提案する、実行するなどにより、他の児童との関係ではなかなか満たされなかった思いに迫れたのではないだろうか。また、その結果がAとのラポール形成につながったと予想できる。第8回で、AはSCにランドセルの中を見せた。ランドセルのポケットには、緊急連絡先や小銭など児童にとって大切なものがしまわれることが多い。高学年の児童にとっては、さらに秘密のもの、プライバシーに関わるものが潜んでいることも推測できる。Aが、そこにしまわれていたものを見せたことで、ラポールが適切に形成されたと判断できるのではないだろうか。

第2期は、当初に学級担任などからも報告されていたように、やや落ち着きに欠ける、不安定に見受けられる様子があげられた。入院や手術のことを家庭などで話し合うことも増えたため、それらに関する思いも増してきたものと考えられる。しかし、第1期にイニシアチブをとることを経験していたため、自分自身の内的世界を表出する方法を選択できたのではないだろうか。それが、クマの手術であろう。詳細なカルテを記入したり、医療用語を多く用いたりするプレイは、自身の経験の影響も大きいと予想できる。しかし、カルテに記入したクマの疾患は、Aが実際に抱えていた疾患とは異なること、また、『心臓ガン』という疾患名を耳にすることはなく、循環器系の疾患だけではなく怪我なども併せて取り上げていたことから、Aはクマに自分自身を投影させながらも、ある程度の距離を保ち、抱える不安や混乱を表現しようとしていたことが予想される。酒木（1999）は、日本語の感情を示

す言葉に「腹」が多いことを指摘し、感情がしまわれる可能性を述べている。本事例で、Aは胸部に関しては、肺を取り出して洗浄する、腹部に関しては、中の綿をカットしたり、位置を直したりしていた。これらのプレイにより、Aは自らの表現や理解が困難な感情や思いをぬぐい去ったり、細分化したりしていたと考えられる。また、頭部に関しては、手術を予定しながらも逡巡し、消毒するのみに留めていた。胸部や腹部とは異なる、Aにとって切り開けない思いがあったと推測できる。

プレイにおける「制限」に関しては、様々な見地からの提言が示されている。深谷（1974）は、「全ての破壊的行動は認容はされないが、許容される」立場のあることを述べている。本事例でのクマへの手術は、破壊的行動ではなく治療的行動であり、必要であるがゆえに行われたものである。そのため、筆者としてはプレイ中の手術を、自然な流れの中での発生ととらえている。

第3期は、Aや母親にとっては予想外のアクシデント発生の時期であった。最終手術に向けたモチベーションが崩れ、立て直しが困難な時期であったと考えられる。母親に関してはモチベーションの再構築に向け、自分自身で認知を修正していったが、Aに関しては、それはプレイの中で行われていたのではないだろうか。この時期は、カードゲームではなく、ジェンガや積み将棋で遊ぶことをもちかけている。ともに、集中を持続させ、慎重にピースや駒を動かしていくゲームである。根気が不可欠になるとともに、崩れてしまった際には一気に緊張感が切れてしまう。しかし、気持ちを切り替えて、再度積み重ねることによって、ゲームを続けていくことが可能となる。この時期のピースや駒は、A自身の手術へのモチベーションに関わっていた可能性があるだろう。

第4期は、中断に思われた面接であったが、Aの方からモーニングワークを行い、終結を提案してきた。手術は無事に終了し、新たな生活をスタートさせていたものの、Aの内的世界では「手術前の自分」との別れ、あるいは「疾患を抱えていた小学生の自分」からの旅立ちがなされていなかったことが予想される。自分自身の生活の中に必要なピリオドを打つ、中学生としての自分の出発点を確認するための作業であったといえよう。最後のプレイが終了後、相談室やSCの方を

振り返らなかったことでも、その様子をうかがうことができる。

わる臨床家として実践を積み重ねていく所存である。

### 〔おわりに〕

プレイに取り組むAの視線、態度などからは、「生きる」こと、新たな自分を奮い立たせるエネルギーが伝わってきたように思われる。子どもの抱える内的世界の複雑さ、プレイセラピーの奥の深さを感じさせられたケースであった。また、小学校における実践であったため、教員とSCとで連携したAのサポートが可能であった。今後もより一層精進し、プレイセラピーに関

### 〔引用文献〕

- 深谷和子(1974)：「遊戯療法」内山喜久雄監修『児童臨床心理学辞典』岩崎学術出版社
- 弘中正美(2005)：「遊戯療法とその豊かな可能性について」河合隼雄・山王教育研究所編著『遊戯療法の実際』誠信書房
- 酒木保(1999)：「木下論文へのコメント 潰瘍性大腸炎の男子とのプレイセラピー」大阪大学人間科学部心理教育相談室紀要, 5, 13-14.

(いわたき だいじゅ・やまざき ひろふみ)



